

第3 問題作成部会の見解

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 英語以外の外国語については、大学入試センター試験の枠組みを受け継いだ『筆記』テストを課し、「リスニング」テストは実施しない。
- 教科としての外国語科の目標である「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う」に基づき問題作成を行う。
また、実際のコミュニケーションを想定した明確な目的や場面、状況の設定を重視する。
- 問題作成に当たっては、CEFR等を踏まえた力を問うことをねらいとして作成する。
その際、大学教育の基礎力を踏まえ、また、高等学校において英語以外の外国語を初めて履修する者もいることを考慮し、問題作成を行う。

2 各問題の出題意図と解答結果

追・再試験の共通テストは、本試験同様、高等学校でドイツ語を学んだ受験者の基本的能力を正確に把握することを目標とした。高等学校学習指導要領（外国語編）で示される目標：「読む」「書く」「聞く」「話す」の4技能を養い、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成し、実践的コミュニケーション能力を養う等の目標の達成度を多面的に評価することを心がけた。

問題作成に当たっては、高等学校学習指導要領（外国語編）を基準に、高等学校教育の現場を参考にし、過去の共通テスト評価資料の分析も手掛かりにして、問題レベルを適正にするよう心がけた。出題語彙については、高等学校で初めてドイツ語を学ぶ生徒の語彙の習得範囲を考慮した。並行して全般的に、具体的な状況においてドイツ語を理解し、自ら表現する力を問う問題を出題している。

上記の基本方針を踏まえ、各問題は、次のような意図に基づき出題されている。

- 第1問：基本的な語の発音（母音の長短、子音の発音、アクセントなど）の習熟度や、基本的な文法知識及び語彙力の習熟度を問う。
- 第2問：基本的な文法知識に基づく文の運用能力を問う。
- 第3問：形態、統語、語用など複合的な作文能力を問う。
- 第4問：会話の内容を総体的にとらえ、話題となっている主題やそれに関わる重要なポイントを正確に読み取る能力、及び話題の展開に沿って登場人物の立場から問題解決の道筋を考える能力を問う。その他、日常会話の基本表現や基本語彙を活用する能力なども問う。
- 第5問：日常生活で頻繁に用いられる表現を多く含む会話から、特定のテーマや会話の流れを把握する能力、及び登場人物の発話意図を正確に把握する語学力を問う。
- 第6問：平易な表現で書かれた短い物語を読み、その概要を把握する力を問う。
- 第7問：比較的短い記事を読み、その概要・要点、論理展開、書き手の意見等を把握する力を問う。

各問題の設問数，配点は次のとおりである。

発音・文法	第1問	7問	21点
	第2問	8問	24点
	第3問	4問	20点
会話・コミュニケーション	第4問	7問	40点
	第5問	6問	30点
読解	第6問	5問	30点
	第7問	7問	35点

3 自己評価及び出題に対する反響・意見等についての見解

出題に用いたドイツ語の総語数は，本試験とほぼ同等である。この点について，日本独文学会ドイツ語教育部会（以下「ドイツ語教育部会」という）より，「問題文全体のボリュームは本試験に比べ，200語近く少なくなっている。しかし，語彙数はやや増加した」「共通テストで扱うには難しい語が散見されたが，受験者に配慮して本文中で注釈が付されていた」というコメントを頂いた。高等学校教科担当教員（以下「教科担当教員」という）からも「昨年度の共通テストと使用語数はほぼ変わらない。難易度も同程度であり，読みにくさや取り組みにくさは感じない」「語彙や表現に関する注は余りなかったが，本文や設問に使われている語彙に配慮を感じた」というコメントを頂いている。

設問構成と出題形式については，「思考力・判断力・表現力等」を含め，ドイツ語を用いたコミュニケーションで問われる多様な能力を測るという目的に沿って検討を重ね決定している。また，設問のテーマに関して，ドイツ語教育部会から「高校生・大学生に身近な場面やトピックが取り上げられており，受験者が取り組みやすい内容である」というコメントを頂いた。全体的な出題傾向についても「高等学校でドイツ語学習を始めた受験者の学習の成果を適切に測れるような，基本的な問題も多く出題されている」との評価を得た。一方で，難易度については，「全体としての難度は，基本的で解きやすい問題と，複雑で解きにくい問題の差が大きいように見受けられた」という指摘もあった。今後はレベルの更なる適正化を図りたい。

第1問 主として単語レベルでの基礎的な発音，文法，語彙の知識を問う問題である。問1～問3は発音に関する問題である。問2では前年に引き続き，同一文中に現れる子音の発音について問うたが，ドイツ語教育部会からは「基本的な知識を問う適切な問題であると評価できる」「本試験と比べても難度に差がなく，適切な出題である」と高評価を得た。問4，問5は動詞の語形変化の問題である。問6では名詞の複数形の語尾を問うた。問7は，日常的に使用頻度の高い名詞の意味に関する知識を問う問題とした。

第2問 実際にドイツ語を運用する日常的な場面において，文の理解を前提にして個々の文法知識及び使用頻度の高い重要な語彙の知識を問う問題である。文法の知識を正確に運用できるかどうかを識別するため，基本的なものからやや難度が高いものまでを出題し，難易度のバランスを工夫した。ドイツ語教育部会からは「本試験と比較して，解きやすい問題が多い」，教科担当教員からは「文法事項や熟語的表現を幅広く学んだ受験者であれば正答を選ぶことができる」とのコメントを得た。

第3問 与えられた語を適切に配置させることで，様々な文法知識や熟語表現を多層的に問う問題である。昨年度と同様に今年度も設問数は4とした。共通テストの趣旨に鑑み，ドイツ語運用能力を総合的に問うことを目的にしている。各問のテーマは，日常的な話題から選ぶよう配

慮したつもりだが、ドイツ語教育部会からは「本試験では日常会話の表現が問われていたが、追・再試験では、パン屋での修行やビザ申請などドイツ語圏での生活を連想させる問いが目立った」と評価された。他方、6つの選択肢のうち5つのみを用いる出題形式については、教科担当教員から「不要な選択肢が1つあり、正確な文法の知識を問う出題となっている」との評価を得た。なお、二つの空欄とも正解しないと得点を得られない点については、次年度以降部分点を認めることも含めて検討中である。

第4問 昨年度の共通テストと同様、一連の会話と場面展開の中から、「自ら課題設定をし、それを実現していく」場面設定を行った。Kentaがベルリンでの留学の終わりに際しての、旅行の計画を友人のAndreasに相談する前半の会話文に続き、後半では、Kenta, Andreas, Fabianの3人によるケルンのカーニバル会場での会話という構成をとった。コロナで外出を制限されてきたと思われる受験者に、積極的にドイツを体験してもらいたい意図を込めて出題を行った。

問1は文脈に合った文の意味を選択する問題である。問2は前後の文脈を理解した上で、内容と合致する発言を選択する問題とした。教科担当教員及びドイツ語教育部会からは、比較的容易に正解を導き出せるとの意見が出された。問3は日程に関する会話を正確に読み取る問題である。対話の内容を正確に読み取ることを目的とした。問4は文脈に合うように慣用表現を空欄補充する問題である。直前の文と直後の文の内容を正確に読み取り、論理的に合致する表現を問うことを目的としている。問5は3人がパレードを見ている様子をイラストから選ばせる問題である。ドイツ語教育部会からは「本文中の前置詞の解釈をイラストを用いて問う問題であり、良問である」という評価を頂き、こちら側の意図が伝わったようで安どした。問6はパレードを見終わる時間を問う問題である。単に時刻を理解する問題ではなく、会話のやり取りから正確な時間を読み取ることを意図した。教科担当教員からは「思考力を問う良問」、ドイツ語教育部会からは「思考力も問われる問題である」との評価を頂いた。問7は、会話文全体から内容に合致するものを二つ選択する問題である。

全体的な評価としては、本試験と比較して全体的に平易であること、文字数がやや少ない点が課題として挙げられている。本試験とのバランスについて、より一層考慮することが課題として挙げられる。

第5問 大学生が日常で話題にする内容を主題としている。ヴァイマルにホームステイを予定しているAyumiが、ヴァイマルに住む友人のRicardoに、滞在先について話す場面から始まり、Ayumiとホストマザーのチャットを経て、Ayumiが抱くホストマザーの発言に対する誤解や不安をRicardoが解く内容となっている。語彙数や設問形式を考慮すると総じてやや容易であるが、その分、日常表現の理解や発話内容の正確な理解を問う問題を作ることを意識した。これについてドイツ語教育部会から「日常的な表現の理解及び会話の内容を正確に把握する能力を試すもの」と評価を頂き、大変うれしかった。

問1は文脈に合うように発言を選択する問題である。ドイツ語教育部会から「会話の流れに対する理解を要するもの」との評価を頂いた。問2はチャット内容を正確に理解し、滞在する部屋を正しく選択する問題である。同時に、階の言い方の違いなど日独における言語的文化的相違に関する知識も問うている。ドイツ語教育部会から「住居に関するドイツ語の基本語彙のみならず、ドイツ語による階数の数え方の知識を問う良問である」との評価を頂いた。問3はチャット内容を正確に理解する問題である。文化的背景の相違により、こうした質問がなされることも背景的知識として持つべきであることを示唆するものである。問4はドイツの食事に関する慣習に関する背景的知識も求める問題である。この点、問2及び問3と合わせて「日本とドイツ語圏における、ことばと文化の違いが意識されている点は興味深い。」というドイツ

語教育部会の評価を頂いたと受け止めている。問5は会話内容に合うようにRicardoのセリフを選択する問題である。前後の内容から論理的に正答を選択させることを目的としている。問6は会話全体の内容を答える問題である。すべての会話内容を正確に理解していることを求めている。

ドイツ語教育部会から「本試験と比べて、選択肢がドイツ語による設問も3題に減り（本試験は4題）、思考力を試すような設問もなく、受験者にとって解きやすかったのではないだろうか」という指摘を頂いた。「日本とドイツ語圏における、ことばと文化の違い」は今後の問題作成に当たっても継承していきたいと考えているが、本試験と追・再試験の問題形式に大きな違いができることは、可能な限り避けられるよう工夫していきたい。

第6問 文学作品を題材としたもので、本試験の第6問と比べるとテキストの語彙数はやや多くなったが、物語の流れをつかめるよう語彙や表現（過去形を現在完了形に書き換えるなど）を分かりやすくすることを意識した。その上で、全体的に本文のストーリーを理解しないと解けない問題になるようにも努めた。本試験にはなかった本文中の挿絵や、問2のイラストを選択する問題は、テキストの理解の手助けとなるよう位置づけた。なお、イラストを回答する問題を加えたことにより、日本語の選択肢から選ぶ問題が本試験と比較して1問減っているが、ドイツ語の選択肢を選ぶ問題の数は変わらない。

ドイツ語教育部会からは、「読む量が増え、登場人物も多いため、ストーリーの把握については難度がやや高めである」との御指摘を頂いた。実際に、本文の内容としては本試験よりもやや複雑ではあるため、物語の出来事を起こった順番に並べる問1が本文理解の一助となるよう問題を作成した。問1については、ドイツ語教育部会から「本文中の内容が選択肢で言い換えられているため、本試験よりは難度が高めである」と御指摘を頂いているが、教科担当教員からは、選択肢の中央に出来事が1文配置されていることにより取り組みやすくなっているとの評価を頂いている。両者の問題の捉え方に違いが出ていることについては、対象とする学習者の設定が異なることに起因していると考ええる。

本試験に挿入されている冒頭のリード文（本文に関する簡単な説明文）が追・再試験では省略されている点について、ドイツ語教育部会から御指摘を受けたが、導入のリード文を付け加えることについては今後、十分に検討を重ねたい。

問4について、ドイツ語教育部会から「最後の段落を丁寧に読めば不適切な選択肢を排除できるが、正答に対する確証も得にくいように思われるため、選択肢の工夫が必要である」との御指摘を頂いた。「消去法で正答を選ぶことになる」という教科担当教員の御指摘もあり、設問については本文から推測する（消去法で正答を導き出す）問題ばかりにならないよう、十分に検討する必要がある。他方で、文学作品の場合は十分に説得力のある読みの可能性をも視野に入れた設問が許容されるとも考える。

第7問 それぞれの段落の記述内容を正確に読み取れるか、また各段落で記述されている内容から全体の内容を有機的に理解できるかを問う問題を作成した。7問のうち5問は、問いと選択肢のいずれもドイツ語にすることで、ドイツ語での表現を正確に読み取れることが前提となる形になっている。

テキストには音楽が人に与える影響について論じたものを選んだ。音楽は若者世代にとっては身近なテーマであろうが、身近だからこそふだん気づかない音楽の影響力を学術研究結果にもとづいて丁寧に読み解く力を問う問題を作成した。問題に対する全体的な評価として、教科担当教員とドイツ語教育部会の双方からテーマの専門性の高さや難語の多さに対する指摘が目立った。例えば問1や問2では本文中の表現と類似するものを選ぶことによって正答にたど

り着くことができるが、正答以外の選択肢に難しい語が若干含まれているとの指摘があった。難語には注を付けたり、使用されている語彙をすべて理解できなくても解けるよう別の表現に言い換えるなどの工夫を施したが、さらなる語彙の難易度調整が必要だろう。

読解問題で極めて重要である精読力については、問6や問8において求められている。これについては、ドイツ語教育部会から良問との評価を受けた。設問に該当する本文箇所だけでなく、テキスト全体の主旨をとらえた総合的な理解は読解問題において非常に重要である。

4 ま と め

現行の学習指導要領においては、英語以外の外国語に関する科目は「英語に関する各科目の目標及び内容等に準じて行うもの」とされ、当該諸言語に応じた明確な指導目標が存在しない中、事実上共通テストが高等学校の学習目標となっている点に鑑み、問題作成分科会としてはドイツ語学習者の裾野を広げるためにも、問題内容と形式、レベルとバランスに配慮しつつ、更に良問の作成に向けて努力を続けていく所存である。